

# ネオテニーの視点で見る日本人サッカー選手 (学習力でチーム精神と強い個を育てる)

○中野 敬三 (有限会社 中野情報技術研究所)

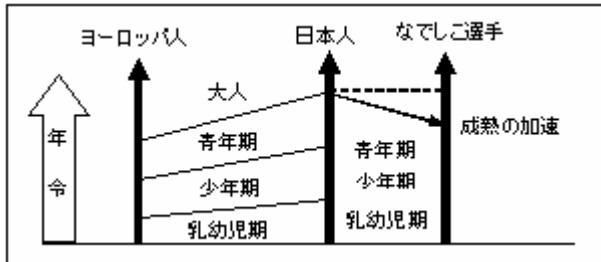
キーワード：サッカー，日本人，ネオテニー

## 【緒言】

日本人選手は決定力不足やフィジカル面での弱さが指摘されるが、なでしこジャパンはドイツW杯で優勝、ロンドン五輪で準優勝を達成した。なでしこジャパンの好成績の要因を分析し、選手育成の参考に供する。

## 【方法】

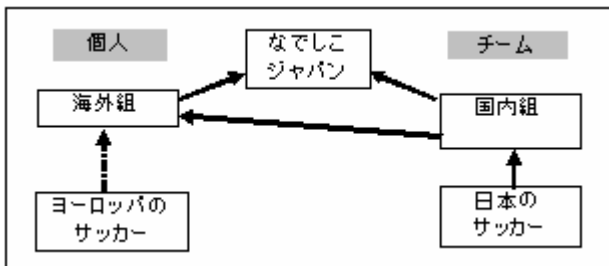
ネオテニー説では、発育の諸段階が延長し、幼児や胎児の特徴が成人にも保存されると考える(幼形成熟)。A.モンターギュは、モンゴロイド系人種(日本人)の頭蓋は、コーカソイド(ヨーロッパ人)よりネオテニー的に進化していると述べている。ネオテニー化の進んだ日本人は、欧米人より成熟は遅いが、脳の発達期間が長く、学習力が持続する。なでしこの好成績の要因を学習力による成熟の加速として分析する。



1 図 なでしこ選手の成熟の加速

## 【結果】

なでしこがチーム中心で戦っていた時は、ドイツ、米国、ブラジルの3強の壁を破ることは困難に見えた。海外組の安藤選手は、「ドイツのサッカーは日本とは全く違う。玉際の戦いが激しく、戦うという意味が日本とは全く違う。チームというより個で戦うので、個の責任が大きい」と、日本との違いを述べている。ヨーロッパ人は成熟が速いので、フィジカルが強く、攻撃性も高い。試合結果も個の責任に帰せられる。海外組の選手は、練習と試合を積み重ねて学習し、個を強化して、ヨーロッパのサッカーを体得した。



2 図 なでしこジャパンの強さの秘密

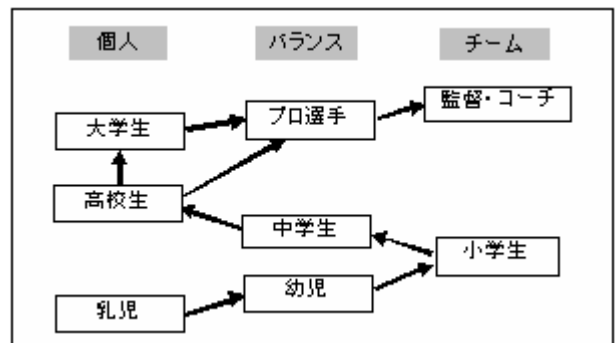
心身の鍛錬で強い個に成長し、プレーに責任を果たす海外組に触発され、国内組も強い個に成長した。

個で勝てず、チームだけでも勝てない、なでしこが、持ち前の学習力で「強い個」と「チーム力」を合わせ持つ、強いなでしこジャパンに生まれ変わった。

## 【考察】

選手育成には、日本人の学習力を生かす、一貫したプログラムが必要であり、3図にその例を示す。

乳児は家庭で優しく育て、自己肯定心を持たせる。幼児期には友達との交流を通じて人間信頼の気持ちを育てる。小学校では規律に従った集団行動により社会性を育て、チームスポーツにより協調性を学ばせる。中学生は思春期を迎え自意識が芽生えるので、自律的行動と責任感を育てる。高校生や大学生は自立の準備期であり、心身を鍛錬して克己心と独立心を育てる。成人したプロ選手には、駆け引きなどの社会的技能を教え、チームの為に責任を持って全力でプレーさせる。監督・コーチには強いチーム精神が求められる。人間は、脳に記憶されていないことは出来ない。脳の発達が著しい子供時代に、サッカーの技術的イメージを記憶させることは、俊敏で創造的なプレーを生み出すためにも非常に大切である。個とチームが、高いレベルでバランスした時、良い選手が生まれる。



3 図 日本人サッカー選手の育成過程

## 【結言】

個の強さで戦う欧米選手に勝つために、日本人選手は、ネオテニーの特徴を理解する必要がある。日本には15歳で元服、文武両道の鍛錬、若者組の伝統・風習があったが、これらはネオテニーの幼児性を取り除き、成熟を加速する社会的仕組みであった。日本人の学習力を生かす育成プログラムで、少年期に協調力とチーム精神を育て、青年期には厳しい訓練で強靱なフィジカルと逞しい自立精神を育てることが、幼児性を脱却した強い日本人選手造りのキーとなる。